

「主体的な学び」の創造

変化の激しい今後の社会を担う児童生徒に必要な資質・能力を身に付けさせるためには、これまでの知識ベースの学びに加え、これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の創造を目指す必要がある。今後、学習者基点の能動的な深い学びとなる「主体的な学び」を促す教育活動のさらなる充実が求められる。

「主体的な学び」とは

これまで、知識量の多寡によって人の能力を判断する捉え方があった。しかし、今後ますます情報化が進む社会においては、知識量の多寡よりも、学習者自身が学んだ知識を相互に関連付け、構造化して、より深く理解し、学習後の異なる場面で活用することができるよう、知識の質を高めることが求められる。知識の質を高めることは、「社会を生き抜くために必要な資質・能力」を育成することにつながる。その育成を目指すために、「主体的な学び」を児童生徒が展開していくことが重要となっている。

「主体的な学び」とは、学習者基点の能動的な深い学びである。

「学習者基点の学び」とは、学習の全てを児童生徒に委ねるということではない。教師は、児童生徒をよく観察して、児童生徒の興味・関心、既有知識、経験、生活等を把握しなければならない。把握した内容を踏まえ、児童生徒の思いや願い、考えなどを大切にしながら、教科等の目標を達成させるために必要な学習内容や効果的な指導方法を取り入れ、学習活動を組み立てていくということである。

「能動的な学び」とは、学習者が、単に活動していることをもって「能動的」とは言わない。学習形態を問わず、学習者が学習活動に自ら積極的に関与する学びでなければならない。

「深い学び」とは、単に知識の習得に留まらず、学んだ知識をつなげて新たな知識を生み出したり、新たな学びを展開したりするような学びである。これに対して、教師から学習者に向けて一方的に授けられただけの知識は長く脳裏に留まらない。このような知識を享受するだけの学びは「浅い学び」と言われる。

このような「主体的な学び」は、学習者自身が、学習活動を振り返り、自らの見方・考え方の高まりや学習の仕方を自覚的に捉え評価することによって、一層促されるものである。これにより、学習者は、更に学習意欲を高め、自らが授業での学びを予習や復習などにつなげていくというような自立的な学習を進めていくことになる。

